

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2005～2008

課題番号：17310142

研究課題名（和文）ロシア東洋学院における日本学の研究

研究課題名（英文）Japanological Studies in the Oriental Institute (Russia)

研究代表者 A ディボフスキー (A DYBOVSKI)  
 大阪大学・大学院言語文化研究科・教授  
 研究者番号：70252723

## 研究成果の概要：

19 世紀後半～20 世紀初頭の日本学を背景に、極東ロシアの最初の大学であった東洋学院（1899-1920）における日本学的研究及び日本語教育の特殊性を解明し、E. G. スパルヴィンをはじめとする東洋学院の日本研究者の主な著作を分析することにより、ロシアの日本学への寄与を評価し、ロシアの東洋学史における東洋学院の意義と役割、国立極東大学（1920-1939）等の後継組織との関係を明らかにした。

## 交付額

（金額単位：円）

|        | 直接経費       | 間接経費      | 合計         |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2005年度 | 4,000,000  | 0         | 4,000,000  |
| 2006年度 | 3,800,000  | 0         | 3,800,000  |
| 2007年度 | 3,800,000  | 1,140,000 | 4,940,000  |
| 2008年度 | 3,700,000  | 1,110,000 | 4,810,000  |
| 年度     |            |           |            |
| 総計     | 15,300,000 | 2,250,000 | 17,550,000 |

## 研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：ロシア・スラブ地域

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 数世紀にわたりロシア帝国は、本国のヨーロッパ部を中心に発達していた。ロシア東洋学史においてもサンクト・ペテルブルグ大学やモスクワ大学及び上記都市の東洋学研究所の日本学が重視され、その他の研究機関が軽視される傾向があり、ロシアにおいて現代日本語教育と科学的日本学の基礎を築いた東洋学院の教官、学生や卒業生によるロシアの日本学への貢献は十分に評価されていなかった。特に、約 25 年にわたり東洋学院で教鞭をとり、当時の世界的なレベルの日本語教育システムを創造し、多数の日本語教材を作った E. G. スパルヴィンのロシアの日本学における役割は過小評価されていた。

(2) ロシアと日本における東洋学院の歴史と E. G. スパルヴィンとその周辺についての若干の著作があったものの、総括的な研究は存在せず、極東ロシアにおける日本学の発達を総合的に記述する著作もなかった。

(3) 20 世紀末から流行ってきた亡命ロシア人についての研究を背景に、極東ロシアの最初の高等教育機関である東洋学院（1899 - 1920）の創立 100 周年に向け、東洋学院の歴史及びその教官、学生や卒業生についての著作が数点出版されたものの、極東ロシアの日本学の行方を辿り、東洋学院の日本学の全体像を把握するような研究は皆無であった。

## 2. 研究の目的

(1) ウラジオストク、ペテルブルグ、ハルビンのアーカイブズなどの資料に基づいて E.G. スパルヴィン、N.V. キューネル、V.M. メンドリンをはじめ東洋学院の教官や卒業生の運命をたどり、その人的交流、特に日本とのつながりを明らかにし、その主な著作とロシアの日本学への貢献を評価し、ロシアにおける日本語教育史を背景に東洋学院（1899-1920）の日本語教育システムの特殊性の解明をはかること。

(2) 19世紀末～20世紀初頭のヨーロッパの日本学とロシアの日本学との関係を究明し、ロシアの日本学史における東洋学院の役割を評価し、日本語教科書の出版をはじめ、20世紀のサンクト・ペテルブルグ（レニングラード）大学や国立極東大学の日本学への影響を明らかにすること。

(3) 東洋学院の教官、学生、聴講生及び卒業生による知られざる著作をはじめ、極東ロシアの日本学者の著作のリストを作成し、100年余の歴史を持つ極東ロシアの日本学の全貌を掴むこと。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究課題にかかわる日本、ロシア、中国（ハルビン）の図書館、アーカイブズ、外務省外交史料館などの資料を体系的に分析し、データ・ベースを作成すること。

(2) ロシアの東洋学史を背景に東洋学院（1899-1920）の教官や学生、聴講生や卒業生による主な著作を歴史的に分析し、東洋学院とその他のロシア内外の教育研究施設における日本語教育システムと日本研究の比較検討的に分析すること。

(3) 東洋学院の主な教材、アーカイブズの史料、1900～1923年に刊行された『東洋学院通報』、授業シラバス、東洋学院の教授会議事録などの分析に基づいて日本語教育システム及び教員と学生による研究活動をロシアの東洋学史のコンテキストの中で総合的に評価すること。

(4) 本研究の具体的な方法論としては、史料の体系的分析のほか、教育システムや教材や外国語教授法の比較的分析や、社会システムの違いによる教育環境や教育思想の対照的分析が応用された。

## 4. 研究成果

(1) 東洋学院の日本語教育システム及び E.G. スパルヴィン、V.M. メンドリン、N.V. キューネルその他の東洋学院の教官、学生、聴講生及び卒業生による主な著作を分析することにより、東洋学院における日本学の特殊性を解明し、東洋学院の教官や学生、聴講生や卒業生によるロシアの日本学への寄与を評価し、20世紀初頭ロシアの日本学の全体像を把握し、ロシアの東洋学史における東洋学院の意義と役割を明らかにした。

(2) E.G. スパルヴィン、V.M. メンドリン、D.M. ポズドネエフ他による日本語教材を現代の日本語教育論及び日本文学理論の見地から分析し、東洋学院以降のロシアにおける日本語教材作成への影響を明らかにした。

(3) アーカイブズや外務省外交史料館の資料等で E.G. スパルヴィン、V.M. メンドリン、D.M. ポズドネエフ、P.G. ワスケヴィッチ他の生涯の軌跡を解明し、帝政ロシア・国内戦・ソビエト時代のコンテキストの中で極東ロシアの日本学の中心的人物であった、人間としてのスパルヴィン像を把握し、在露日本人及び日本とのつながりを明らかにした。

(4) 日本研究のウラジオストク学派の創始者である E.G. スパルヴィンのラトビアでのルーツを調べたことにより、その母語がラトビア語であったことを明らかにし、中国のロシア社会の史料の考察により、1933年のハルビンでのスパルヴィン死去の経緯を解明した。

(5) 1899 - 1900、1903、1906、1907、1922年の E.G. スパルヴィンの日本滞在にかかわる史料を分析することにより、E.G. スパルヴィンと二葉亭四迷との関係解明など日ロ人的交流史、日ロ関係史の若干の事実を解明した。

(6) 1931年に日本語で出版された E.G. スパルヴィンの著作『横目で見た日本』などの分析により人間と研究者としてのスパルヴィン像の解明に寄与をした。

(7) E.G. スパルヴィンと和泉良之助（『浦潮日報』の編集長）、大竹博吉（『ナウカ』社の創立者）、前田清嗣（東洋学院の最初の日本語講師）などの日本人との交際を考察することにより、20世紀初頭の在ウラジオストク日本人の活躍の若干の経緯を解明した。

(8) ロシア、日本、中国（ハルビン）における E.G. スパルヴィンの社会的活動を考察し、本人による日露関係発展・日露交流史への貢献を明らかにした。

(9) 東洋学院の後継組織である国立極東大学(1920-1939)の日本学者の主要な著作と日本語教材を考察して、教育と研究の分野における両組織の継承性を確認した。

(10) 極東国立大学の科学情報研究所の研究員の手を借りて極東ロシアで活躍した日本研究者の教育研究著作目録(1900-2008)を作り、東洋学院と現代の極東ロシアにおける日本語教育及び日本学的研究との関連性を明らかにした。

(11) 『新東洋学』、『東洋スタディオ』などのロシアの極東で刊行されたソビエト時代の東洋学雑誌の内容を分析することにより、ソビエト時代の到来にともなった極東ロシアの日本学の変貌の解明に着手した。

(12) 将来の研究のパイロットプロジェクトとして極東国立大学の東洋学院を始めとするウラジオストクの学生と大阪大学の学生の例でロシアと日本の若者の価値観比較についての日露共同研究を開始した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 20 件)

(1) A.ディボフスキー「極東ロシアにおける日本学の行方 —東洋学院(1899-1920)を中心に—」『言語文化研究』第 35 号 2009 年、95-117 ページ、査読あり。

(2) A.ディボフスキー「極東ロシアにおける日本学の行方 (完全版) —東洋学院(1899-1920)を中心に—」『ロシアの極東における日本学の行方 論文集・文献目録』ドラゴン印刷 大阪 2009 年、25-50 ページ、査読なし。

(3) 生田美智子「知られざる国立極東大学東洋学部の雑誌 —『東洋スタジオ』—」、『ロシアの極東における日本学の行方 論文集・文献目録』ドラゴン印刷 大阪 2009 年、105-113 ページ、査読なし。

(4) ヨコタ村上孝之「スパルヴィンの教育システムと文芸」『ロシアの極東における日本学の行方 論文集・文献目録』ドラゴン印刷 大阪 2009 年、25-50 ページ、(露文) 査読なし。

(5) 藤本和貴夫「日本における E.F.スパルヴィン—ロシア革命後の日本訪問(1922 年)について—」『ロシアの極東における日

本学の行方 論文集・文献目録』ドラゴン印刷 大阪 2009 年、81-94 ページ、査読なし。

(6) 藤本和貴夫「日本におけるスパルヴィンの活躍について」『第 23 回ロシア科学アカデミー極東支部・日本シンポジウム資料』ウラジオストク、2007 年、7-14 ページ、(露文) 査読なし。

(7) A.ディボフスキー「東洋学院(1889-1920)の教育システムと日本語教育の特殊性」A.ディボフスキー編『ロシアの最初の職業的な日本学者 —ラトヴィア・ロシア・日本共同研究—』ウラジオストク、2007 年、131-185 ページ、(露文) 査読あり。

(8) A.ディボフスキー「E.スパルヴィン著書『横目で見た日本』における著者像」『言語文化研究』第 33 号、2007 年、193-220 ページ、(露文) 査読あり。

(9) E.V.エルマコーヴァ、A.ディボフスキー(2 番目)「E.G.スパルヴィン 伝記のページ」A.ディボフスキー編『ロシアの最初の職業的な日本学者 —ラトヴィア・ロシア・日本共同研究—』ウラジオストク、2007 年、7-35 ページ、(露文)、査読あり。

(10) 藤本和貴夫「日本におけるスパルヴィン」A.ディボフスキー編『ロシアの最初の職業的な日本学者 —ラトヴィア・ロシア・日本共同研究—』ウラジオストク、2007 年、41-58 ページ、(露文) 査読あり。

(11) 生田美智子「実用日本学の始祖スパルヴィン」A.ディボフスキー編『ロシアの最初の職業的な日本学者 —ラトヴィア・ロシア・日本共同研究—』ウラジオストク、2007 年、52-68 ページ、(露文) 査読あり。

(12) ヨコタ村上孝之(1 番目)、L.Galvane「リガにおけるスパルヴィン」A.ディボフスキー編『ロシアの最初の職業的な日本学者 —ラトヴィア・ロシア・日本共同研究—』ウラジオストク、2007 年、69-73 ページ、(露文) 査読あり。

(13) ヨコタ村上孝之「マトヴェエフ家族の人生と創作活動」『第 21 回ロシア科学アカデミー極東支部・日本シンポジウム資料』ウラジオストク、2007 年、99-110 ページ、(露文) 査読なし。

(14) A.ディボフスキー「東洋学院の教育システムと日本語教育の特殊性を求めて」『日本学の諸問題 露日外交関係回復 50 周年、ロシア科学アカデミー日本語学校設立 270 周年記念国際シンポジウム資料』サンクトペテルブルグ大学出版局、サンクトペテルブルグ、2006 年、41 - 63 ページ、(露文) 査読なし。

(15) 藤本和貴夫「日本とロシアー過去と現在」『大阪経済法科大学総合科学研究所年報』25 号、2006 年、80-86 ページ、査読なし。

(16) 藤本和貴夫「承認への道：1925 年における日ソ外交関係の確立」『ロージナ』2005.10 号。(モスクワ) 23-26 ページ、(露文) (依頼原稿) 査読なし。

(17) 藤本和貴夫「ウラジオストクで書かれた『日本居留民論』『セーヴェル』第 20 号、84-87 ページ、査読有り。

(18) 生田美智子 (ミハリロバ・ユリヤと共著論文)「日露戦争とロシア女性」橋本順光ほか『日露戦争研究の新視点』成文社、2005 年、161-177 ページ、査読なし。

(19) ヨコタ村上孝之「ウラジオストクにおける二葉亭四迷」論文集『ロシアと日本 人文研究』極東国立大学出版局、ウラジオストク、2005 年、63-70 ページ、(露文) 査読なし。

(20) ヨコタ村上孝之「20 世紀初頭のウラジオストクにおける文学創作と諜報活動」論文集『ロシアと日本 人文研究』極東国立大学出版局、ウラジオストク、2005 年、276-82 ページ、(露文) 査読なし。

[学会発表] (計 6 件)

(1) ヨコタ村上孝之「スパルヴィンの教育システムと文芸」国際研究会「ロシアの極東における日本学の行方」大阪大学言語文化研究科 2009 年、1 月 6 日

(2) 生田美智子「在満ロシア人と日本人の関係」「ハルビンと中東鉄道建設 100 周年会議」ハバロフスク、2008 年 11 月 22 日

(3) 藤本和貴夫「日本におけるスパルヴィンの活躍について」「ロシア科学アカデミー極東支部と関西の研究者の歴史経済学国際シンポジウム」2007 年 9 月 10 日

(4) 生田美智子「日本における N.マトヴ

ェエフ」極東国立大学の東洋学院における国際研究会 2007 年 11 月 13 日

(5) A.ディボフスキー「東洋学院の教育システムと日本語教育の特殊性を求めて」『日本学の諸問題 露日外交関係回復 50 周年、ロシア科学アカデミー日本語学校設立 270 周年記念国際シンポジウム』サンクトペテルブルグ大学 2006 年 10 月 22 日

(6) A.ディボフスキー「E.スパルヴィン著書『横目で見た日本』における著者像」国際シンポジウム「東洋学院における日本学 1899 - 2006」2006 年 5 月 6 日

[図書] (計 3 件)

(1) 『ロシアの極東における日本学の行方 論文集・文献目録』A.ディボフスキー編 ドラゴン印刷 大阪 2009 年、317 ページ、査読なし。

(2) 『ロシアの最初の職業的な日本学者ーラトヴィア・ロシア・日本共同研究ー』A.ディボフスキー編 (露文) 極東国立大学出版局、ウラジオストク 2007 年、188 ページ、査読あり。

(3) 望田幸男、野村達朗、藤本和貴夫 (3 番目)、他 3 名編『西洋近現代史研究入門 (第 3 版)』名古屋大学出版会、2006 年、536 ページ、査読なし。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

A Dybovski (A ディボフスキー) 大阪大学・大学院言語文化研究科・教授 研究者番号：70252723

### (2) 研究分担者

生田 美智子 (IKUTA MICHIKO) 大阪大学・大学院言語文化研究科・教授 研究者番号：40304048

藤本 和貴夫 (FUJIMOTO WAKIO) 大阪経済法科大学・教養部・教授 研究者番号：70029734

ヨコタ村上 孝之 (YOKOTA-MURAKAMI TAKAYUKI) 大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授 研究者番号：00200270

(3)連携研究者

E. V. Ermakova (E.V. エルマコーヴァ) ロ  
シア極東国立大学・歴史学部・教授

Z. F. Morgun (Z.F. モルグン)ロシア極東国  
立大学・東洋学院・助教授